法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

研究展望　2017年（平成29年）

著者	深澤 希望，表 きよし，小室 有利子，中司 由起子，山中 玲子，伊海 孝充，横山 太郎，竹? 晶子
出版者	法政大学能楽研究所
雑誌名	能楽研究
巻	45
ページ	195-227
発行年	2021-03-25
URL	http://hdl.handle.net/10114/00024305

研究展望　二〇一七年（平成二十九年）

平成二十九年に刊行された能・狂言の単行本、および雑誌等に発表された論文を取り上げる。例年と同じく、単行本（深澤希望）、資料紹介・資料研究（表きよし）、能楽論研究（表）、能楽史研究（小室有利子）、作品研究（中司由起子）、演出・技法研究（山中玲子）、狂言研究（伊海孝充）、その他（横山太郎）、外国語による能楽研究（竹内晶子）に分類し、分担執筆をおこなっているため、全体を展望するというより個別の論の紹介となっていることをお断りしておく。また、重要な論稿を見落とすなどの遺漏もあろうと思う。ご寛恕を願う。

【単行本】

『能・狂言の誕生』（諏訪春雄著。A5判314頁。1月。笠間書院。三五〇〇円）

中国大陸芸能の影響に焦点を当て、能・狂言の成立までと、その展開を分析する一書。第一章 能・狂言研究史（1誕生の過程が分かっていない能）、第二章 日本の中世文化（2東アジア社会と連動した中世文化）、第三章 大陸芸能と能・狂言（3能と追儺／4能面と大陸仮面／5能・狂言・複式夢幻能／6五から三へ／7猿楽の身分）、第四章 能の誕生（8能の誕生と誕生地／9曲舞と能／10観世座の能楽界制覇）、第五章 日本文化の象徴（11日本文化の象徴としての能・狂言）、から成る。

『能面の見かた　日本伝統の名品がひと目でわかる』（宇高通成監修。小林真理編著。A5判176頁。1月。誠文堂新光社。二六四〇円）

独学で多数の能面を打ち、能面作家としての側面もあった宇高通成（金剛流シテ方）監修の入門書。序章（小林真理「ジャポニスムと日本の伝統文化」／宇高通成「能面への誘い」／宇高通成「能面のルーツ」／代表的な能面の一覧）、一章 能面の分類と種類、二章 解説「能面入門」、三章 狂言面、四章 図説「能面の見分けかた」、五章 原木から面打ちの工程まで、という構成。カラー図版（面によっては舞台写真も添えられる）だけでなく、イラストによる解説もあり、能面の魅力を読者に分かりやすく伝える工夫がなされている。狂言面は萬狂言による執筆で、野村万蔵家所蔵の面を掲載す

る。

『花伝う花　世阿弥伝書の思想』（上野太祐著。A5判139頁。1月。晃洋書房。二六〇〇円）

博士論文『世阿弥伝書の思想の研究』を書籍化したもの。序章、第一部ことの起こりとしての思想史研究（第一章「初心不可忘」の源／第二章 変容する「感」／第三章 偈を読み替える世阿弥―「花情」をどう読むか／第四章『毛詩』を読み替える世阿弥―「正しき感」をめぐって）、第二部 問われたこととしての思想研究（第一章 能における「芸術」性の根源／第二章 世阿弥の禅語が捉えていたもの／第三章 世阿弥伝書の根本問題／第四章 見手が「感」ずるということ―謡曲《忠度》を例にして）、終章、という構成。能楽研究と思想研究の溝を埋めることに挑んだ一書。能楽研究の成果を丹念に踏まえる手続きを経た上で、著者独自の世阿弥の思想研究が手堅く展開されている。とくに、第二部第四章でなされた「世阿弥能楽論研究から得た知見と、能の作品研究との接続をはかる」試みは、独自性があり、かつ示唆に富む。なお、佐藤弘夫による書評が『日本思想史学』49号にある。

『能絵鑑』（国立能楽堂事業推進課調査資料係編。A4判変型55頁。1月。日本芸術文化振興会。一二二〇円）

二〇一七年一月四日～三月一七日の会期で国立能楽堂資料展示室において開催された国立能楽堂企画展示「能絵の世界」（小林健二監修）の図録。公益財団法人宇和島伊達文化保存会蔵（一五〇図）・野上記念法政大学能楽研究所蔵（一五〇図）・国立能楽堂蔵（五〇図）の三種の能絵鑑をカラー写真で掲載。小林健二「「能絵鑑」三種とその位相」の論文と、諸本資料解説を収め、巻末には曲名索引を付す。

『昭和の能楽 名人列伝（淡交新書）』（羽田昶著。新書判303頁。3月。淡交社。一二〇〇円）

シテ方二二名、ワキ方一名、狂言方六名、囃子方四名、計三三名の伝記と舞台写真を収める。半世紀以上、数多くの舞台を見続けてきた著者の確かな目を通して、昭和の名人達を知ることができる一書。

『「型破り」の発想力　武蔵・芭蕉・利休・世阿弥・北斎に学ぶ』（齋藤孝著。四六判256頁。3月。祥伝社。一六五〇円）

『風姿花伝』の秘すれば花、離見の見、衆人愛敬などから、世阿弥の発想力を紐解く。序章「実は、日本人はこんなにクリエイティブだった！」、第一章「「型」を身につけることから始める―世阿弥」、第二章「必ず結果を出すための「吟味・工夫・鍛錬」―宮本武蔵」、第三章「発想力は「目のつけどころ」である―松尾芭蕉」、第四章「価値観そのものを創り出す―千利休」、第五章「江戸時代のクールジャパン―葛飾北斎」という構成。

『平曲と能楽―能・狂言に影響を与えた平曲―　演奏記録DVD&解説・成果報告書』（荻野検校顕彰会編。B5判44頁。3月。文化庁・一般財団法人荻野検校顕彰会。非売品）

二〇一六年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業「平曲演奏家の育成に関わる基盤整備事業」の成果報告書。一「猿楽の能」に素材・文字などを提供した「平家語り」（大森北義）、二「能・狂言に影響を与えた平曲」（林和利）、三収録句と演者紹介、という三部構成。演者と所収演目は下記の通り。今井勉（平家琵琶検校）の平曲「卒塔婆流」、大野美子（後藤光樹平家琵琶伝承之会会員）の平曲「足摺」、久田勘鷗（観世流シテ方）の「俊寛」、今井勉の平曲「奈須与市」、奥津健太郎（和泉流狂言方）の「那須語」。付録DVDあり。

『花もよ叢書10　翁　三番叟』（森田拾史郎写真。田中英機文。B5判149頁。3月。花もよ編集室。一二九六円）

能楽・舞踊・民俗芸能の翁三番叟をテーマとする写真集（モノクロ）。能九八点、舞踊一一点、民俗芸能三〇点の計一三九点を所収。田中英機のエッセイ「翁芸のみなもと」を付載する。

『花もよ叢書12　ワキ方』（森田拾史郎写真。津村禮次郎・いずみ玲文。B5判149頁。3月。花もよ編集室。一二九六円）

ワキ方の写真集（モノクロ）。僧、山伏、武士、臣下・貴族、唐人、その他、と登場人物で六つに分類し、計一三八点を収める。津村禮次郎（観世流シテ方）「ワキ方に想う」と、いずみ玲「「個」を捨てた癒し人」のエッセイ二本を付載する。

『金春の能〈上〉中世を汲む』（金春安明著。A5判319頁。3月。金春円満井会。三五〇〇円）

自流の能について金春流シテ方八十世宗家が、みずからまとめた一書。第一章「《翁》をめぐって」、第二章「現行曲の解題―五十音順（ア―コ）」、第三章「温故知新」の三章から成る。第一章は、奈良の地に根差した金春流の《翁》の歴史と現在を知ることができる章。「南都両神事能から見た古都の虚実」、「春日若宮おん祭　猿楽座参勤」（カラー写真。猿楽座参勤の様子を時系列に追う）、金春穂高「《神楽式》」、「金春の《翁》」という内容。第二章は、『金春月報』連載の「観能のための曲目解説」に基づくもので、〈藍染川〉から〈胡蝶〉まで六一曲の現行曲を登場人物（面装束）・あらすじ・鑑賞・校異と解釈、の四項目に分けて解説する。音韻に明るい著者だからこそ成し得る、詳細な分析がなされた曲が多数あり有益。第三章は、復曲・稀曲・音韻に関する章で、「復曲《この花》について」（中司由起子「豊公能《この花》について」／《この花》影印と校訂本文）、「稀曲」（番外曲《浦島》／一調《曙》／謡物《奈良八景》／《伯母捨》「古式」について）、「音韻から考える」（心なくれそくれはどり／同じはちすの蓮生法師／永正三年本《玄上》は明和ころの書写か？／表章「金春安明氏の論

文を読んで」）が収録される。中巻・下巻が予定されているとのことで、その刊行が待たれる。

『能楽研究叢書6　近代日本と能楽』（宮本圭造編。A5判380頁。3月。法政大学能楽研究所）

共同利用・共同研究拠点「能楽の国際・学際的研究拠点」の成果物。二〇一三年一〇・一一月に行われた第一七回能楽セミナー登壇者による論文と、特別寄稿二本（＊印を付す）を収録。多角的な視点から紐解き、能楽の近代史に新たな光を当てる。《Ⅰ 新たな時代の幕開け》田中優子「伝統はいかにして生き残ったか」、宮本圭造「幕末維新を迎えて能役者はどうなったか」、三浦裕子「芝能楽堂と能楽社・能楽堂」。《Ⅱ 能楽の大衆化運動》横山太郎「民衆化の行方」、佐藤和道「メディアと能楽」、伊藤真紀「「女申楽」と木内錠」＊。《Ⅲ 国粋芸術としての能楽》徐禎完「植民地朝鮮と能・謡」＊、中嶋謙昌「「満洲」における能楽」、宮本圭造「能と軍国主義」。セミナー当日に展示した関連資料を口絵として収録する。

『能楽研究叢書7　金春家文書の世界―文書が語る金春家の歩み―』（宮本圭造編。A5判209頁。3月。法政大学能楽研究所）

共同利用・共同研究拠点「能楽の国際・学際的研究拠点」の成果物。二〇一四年九月に開催したシンポジウムの報告集。金春大夫歴代のうち禅竹・禅鳳・安照・安喜・安住の残した文書に焦点をあて、金春家の歩みを追う。シンポジウム当日に展示した能楽研究所が所蔵する関連資料を口絵として掲載。巻頭言に金春安明「秘伝書の公開化とその受容の仕方」。発表に基づく論文として、宮本圭造「金春家文書伝来の経緯」、高橋悠介「金春禅竹の信仰圏と翁論」、石井倫子「金春禅鳳自筆謡本の周辺」、深澤希望「被相伝者から見る金春安照型付」、宮本圭造「家芸断絶の危機はどう乗り越えられたか」、小林健二「道を継ぐ者達への遺言」の六本を収録する。

『「能楽」のふるさと大淀町　歴史と現在の取り組み』（奈良県大淀町教育委員会編。A5判100頁。3月。）

二〇〇一年度より開始された「大淀町能楽プログラム」の取り組みを紹介するもの。1特別寄稿、2能楽の歴史、3桧垣本猿楽について（年表・系図）、4大淀町能楽プログラム、5大淀町能楽プロブラムの軌跡～年度別実施内容～、から成る。特別寄稿には、藤田六郎兵衛「能楽を生きている」、大倉源次郎「大淀町能楽プログラムに期待する」、見市泰男「タイムカプセルに入った桧垣本七郎」等のエッセイが収められている。

『日本音楽のなぜ？　歌舞伎・能楽・雅楽が楽しくなる（放送大学叢書037）』（竹内道敬著。B6判193頁。3月。左右社。一八五〇円）

「日本音楽のなぜ」の副題で書き下ろされた、放送大学の講座「日本音楽の基礎概念」（一九九六年度から開講）の参考教材をもとにする一書。全十五章にわたり、メロディー・ノリ・演奏形態・楽器など基礎的事項について噛み砕いて解説する。

『能・狂言（日本の伝統芸能を楽しむ）』（中村雅之著。A4判55頁。4月。偕成社。三〇〇〇円）

児童書。基礎知識編・支える人たち編・資料編に分けて、能・狂言について幅広く紹介する。

『外国で能を教える　異文化の中の能楽』（三上紀史著。A5判244頁。5月。檜書店。三三〇〇円）

英米文学者で、三世梅若万三郎（観世流シテ方）に師事する著者が携わった、海外での能に関する活動をまとめたもの。第一章「アメリカのコーカー・カレッジで能を教える―日本の伝統芸能を見たことのない人たちの反応」、第二章「能シェークスピア研究会」のアメリカ公演旅行に参加する―英語能と融合劇の問題を考える」、第三章「梅若研能会の「英語ジャパン・フェスティバル一九九一」参加公演旅行に同行する―イギリスの演劇評論家と観客の反応」、第四章「タイ・チュラーロンコーン大学で能を教える―謡曲を文学作品として講読する」という構成。外国人の目を通すことで得た、能についての新たな発見が綴られている。

『田原市博物館特別展　近世能装束の世界　用の美―武家貴族の美意識』（浅井能楽資料館・佐藤芳彦記念山口能装束研究所・田原市博物館編。A4判127頁。7月。浅井能楽資料館）

二〇一七年七月一五日～一二月一〇日の会期で、田原市博物館において開催された展示の図録。浅井能楽資料館と山口能装束研究所所蔵の能装束・能面を中心とする展示で、室町時代の伝統的意匠を受け継ぐ、近世の能装束の美を紹介する。山口能装束研究所の山口憲「近世の能装束―用の美―」の解説と、出品リストを掲載する。

『能『高砂』にあらわれた文学と宗教のはざま』（島村眞智子著。菊判385頁。7月。冨山房インターナショナル。六八〇〇円）

歴史学・宗教学的な視点から、世阿弥の生涯と〈高砂〉について論じる一書。第一編 北方の古儀復興と再編（第一章 中世の時空と神々／第二章 神々と舞歌―院政期の舞歌と児）、第二編 脇能の成立と奉幣使（第一章 脇能と世阿弥／第二章 北朝の奉幣使発遣）、第三編 中世日本紀と能（第一章 能から見る中世日本紀の展開／第二章 中世の出雲信仰）、終章 神々の変容―児世阿弥と脇能、から成る。

『舞うひと　草刈民代×古典芸能のトップランナーたち』（草刈民代著。浅井佳代子写真。A5判208頁。9月。淡交社。

一八〇〇円）

月刊『なごみ』に連載された「草苅民代の舞おどりの流儀」（二〇一六年一～一二月号）を一書にまとめたもの。著名なバレリーナとして活躍し、現在は女優である著者と、雅楽・能楽・歌舞伎・舞踊・文楽人形遣い・琉球舞踊・舞踏の各界の第一線で活躍する演者十二名との対談集。能楽からは、観世清和（観世流シテ方二十六世宗家）と梅若玄祥（観世流シテ方。二〇一八年に四世実を襲名）、野村萬斎（和泉流狂言方）との談話が収められている。

『能　650年続いた仕掛けとは（新潮新書732）』（安田登著。新書判224頁。9月。新潮社。七六〇円）

鏑木岑男の舞台に接し、高校教師から能楽師へ転身した経歴を持つ安田登（下掛宝生流ワキ方）による入門書。「第一章 能はこうして生き残った」から「第八章 能を知るとこんなにいいことがある」までの八章立てで、能楽史・世阿弥の事績・能の演劇的特徴・能舞台の効果など多岐にわたる内容を、能楽師ならではの視点と、明解な文章で解説する。ＡＲ（拡張現実）やＶＲ（仮想現実）を例にとり、夢幻能の構造を説明するなど、読者が能を身近なものとして感じられる語り口が特徴。巻末には、「能を観たい、習ってみたい、知りたい方」へ、の付録もある。

『大倉源次郎の能楽談義』（大倉源次郎語り・文。生田ケイ子・濱崎加奈子・原瑠璃彦編。Ａ５判272頁。10月。淡交社。一八〇〇円）

大倉源次郎（大倉流小鼓方十六世宗家）の還暦を記念して編まれたもので、二〇一七年四～六月に開催された計四回の講座に基づく。これまでの芸道を振り返りつつ、能楽の今後への思いが込められた一書。第一章「能の来た道」、第二章「鼓という楽器」、第三章「能楽への模索」、第四章「旅する能」、第五章「現代職人気質条々」から成る。舞台写真を中心とするアルバムや、コラム「私にとっての能」（磯崎新・内田樹・坂本龍一・新宮晋・多川俊映・田中利典・長岡千尋・松岡心平・藪内佐斗司）も収録される。

『平成29年度国立能楽堂特別展　備前池田家伝来野崎家能楽コレクション』（国立能楽堂事業推進課調査資料係編。Ａ４判変型119頁。10月。日本芸術文化振興会。二五五〇円）

二〇一七年一〇月四日～一二月一五日の会期で国立能楽堂資料展示室において開催された展示の図録。野崎家塩業歴史館（公益財団法人竜王会館）所蔵の備前国岡山藩主池田家伝来の能楽資料を展示。辻則之「野崎家の歴史と能楽資料」、山内麻衣子「野崎家能楽コレクションの伝来」、田邉三郎助「岡山野崎家の能・狂言面」、山内麻衣子「野崎家の能装束と面袋」、小林すみ江「匠の技の結晶を見る―野崎家の能人形所見―」、小林健二「野崎家塩業歴史館蔵『和漢図貼交屏風』の能絵」の論文六本を収める。能・狂言面、能装束、楽器・

小道具、能人形、能絵の図版を掲載。末尾には資料解説を付す。

『これで眠くならない！能の名曲60選』（中村雅之著。Ａ５判255頁。10月。誠文堂新光社。一八〇〇円）

横浜能楽堂館長である著者がまとめた観能手引き。第一章「これだけは知っておきたい「能」のこと」、第二章「誰でも楽しめる名曲三十曲」、第三章「能は、動く美術館」、第四章「もっと楽しみたくなった時の三十曲」、第五章「能が観たくなったあなたに」、という五章から成る。随所にあしらわれた坂口和歌子のイラストが目を引く。第二章は、上段に舞台進行（付舞台写真）、中段に場面・登場人物（イラスト）、下段にあらすじ、と三段に組むことで、舞台の流れを追いやすくする工夫がなされている。

『無辺光　片山幽雪聞書』（片山幽雪著。宮辻政夫・大谷節子聞き手。四六判301頁。10月。岩波書店。三三〇〇円）

二〇一五年に逝去された片山幽雪（観世流シテ方）の聞書。最晩年となった、二〇一三年九月から約一年にわたって行われた二五回の聞き取りに基づいている。昭和の能楽史を伝える貴重な一書。第一章「修業時代」、第二章「京都観世会館」、第三章「父、博通」、第四章「片山九郎右衛門家の代々」、第五章「日吉神社の「ひとり翁」」、第六章「忘れ得ぬ人々」、第七章「三十五番を語る」、第八章「三老女」から成る。大谷節子「月に遊ぶ人―片山幽雪」と、宮辻政夫「あとがき」、図版出典一覧を付す。

『特別展　日本文化の源流―いまに続く芸能―』（奈良県立万葉文化館編。10月。Ａ４判変型142頁。奈良県立万葉文化館。一五〇〇円）

二〇一七年十月二十八日～十二月十日の会期で奈良県立万葉文化館において開催された展示の図録。延岡市内藤記念館所蔵の能面を中心として、古代の伎楽・散楽から能楽へと至る日本の芸能史を追う企画。図版は、第一章「大和の芸能土壌―鬼から翁へ」、第二章「大和の村祭りと神事能」、第三章「「天下一」の世界」の三章立ての構成。あわせて以下、四本の論考、井上さやか「日本文化の源流―『万葉集』と伝統芸能―」、増田豪「延岡藩における神事能」、見市泰男「内藤記念館所蔵能面について」、宮本圭造「大和猿楽の成立と展開―古代から中世へ―」を所収する。宮本稿は、群小猿楽が演能活動を行っていた村祭りの神事能に目を向ける必要を説き、村々の神事能を回ることで得た禄物や楽頭料が大規模祭礼（薪猿楽や春日若宮おん祭り）の基盤となっていたこと、「惣村」（鎌倉期にできた新たな村落形態）の鎮守祭礼で猿楽が盛んに演じられたことで新たな猿楽座の発生を促したこと等を指摘している。巻末には、解説目録と、大和地方における村祭りの神事能分布図を付す。

『多田富雄コレクション４　死者との対話【能の現代性】』

（多田富雄著。四六判344頁。11月。藤原書店。三六〇〇円）

免疫学者であり、新作能の作者としても著名な多田富雄の全五巻からなる著作集うちの一冊。本書は、五篇の詩、エッセイ、新作能の詞章・創作ノート、で構成されている。第一章「舞台によせて」（〈詩〉歌占／雨と女／水の女／OKINA／死者たちの復権）、第二章「能を語る」（春の鼓／戸井田道三『観阿弥と世阿弥』／老女の劇―鏡の虚無／能を観る／能の本を書く事―世阿弥の『三道』をめぐって／脳の中の能舞台／日本の伝統／姨捨／能楽二十一世紀の観点／第三の眼―成恵卿『西洋の夢幻能―イェイツとパウンド』／間の構造と発見―能の音楽を中心として／日本人とコイアイの間／ビルマの鳥の木／白洲さんの心残り／山姥の死―鶴見和子さん）、第三章「新作能」（無明の井／望恨歌（マンハンガ）／一石仙人／原爆忌／生死の川――高瀬舟考／花供養）。巻末には、赤坂真理「切実な切実な、生命の書」と、いとうせいこう「貪欲と寛容について」の解説がある。

『変調「日本の古典」講義　身体で読む伝統・教養・知性』（内田樹・安田登著。B6判289頁。12月。祥伝社。一六〇〇円）

内田樹（思想家・武道家）と安田登（下掛宝生流ワキ方）の論語と能楽をめぐる対談集。第一章「身体で日本を読む―二重構造の日本文化」、第二章「古典を身体で読み直す―論語、六芸、「うた」の力」、第三章「身体感覚で考える―中世の身体技法にあるヒント」、第四章「教養を身体化する―日本人は何をもって日本人たることができるのか」、第五章「「共身体」を形成する―「個」を超えるために」で構成されている。

『能楽名作選　原文・現代語訳　上・下』（天野文雄著。B6判384・392頁。12月。KADOKAWA。各二五〇〇円）

二〇一三年に刊行された『能を読む』全四巻（梅原猛・観世清和監修、角川学芸出版）所収の一二八曲から、上演頻度の高い五九曲を選び、まとめたもの。上巻には三〇曲、下巻には二九曲を収録する。あらすじ・鑑賞のポイントを冒頭に置き、詞章（現行観世流）と現代語訳を二段で組む。現代語訳には、能の戯曲構造を捉えやすいように、登場人物のセリフでない三人称叙事文を二字下げにする工夫がなされている。それぞれ巻末に、書下ろしのエッセイ「能への招待（上）―能は不変ではない」「能への招待（下）―能はひとつではない」を付載する。（深澤）

【資料研究・資料紹介】

入口敦志・江口文恵・田草川みずき・深澤希望・柳瀬千穂・竹本幹夫「『葛巻昌興日記』所引能楽記事稿（貞享三年正月・二月・三月）」（『演劇研究』40。3月）は、加賀藩主前田綱紀の小姓だった葛巻昌興の役務日記の能楽記事を翻刻・解説する。三か月の限られた範囲ではあるが、正月の記事からは前田家の年賀拝礼や謡初の様子を窺うことができる。二月

一日仙渓院御慰能、三月九日保科正信招請饗応能、三月二十六日織田信武・松浦鎮信等招請饗応能など、具体的な番組が記載された催しもあり、その準備の様子も知ることができる。番組を調整する段階で〈三山・鶏龍田・横山〉などが候補に挙がるところからは、将軍徳川綱吉の影響による稀曲上演の傾向を感じさせる。国元から呼び寄せた御手役者竹田平四郎の謡や仕舞を楽しんだり、金春家の由緒を尋ねたりする様子も記されており、また筆者の葛巻昌興と丹直清（室鳩巣）との交流も窺うことができる。

樹下文隆「〈資料紹介〉神戸女子大学古典芸能研究センター蔵「謡道歌巻」二種」（『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』11。6月）は謡道歌を集成した二種の巻子本を紹介したもの。一つは志水文庫蔵『音曲秘伝之哥』で、服部宗巴（福王盛親）の奥書があり、46首を収録している。もう一つは伊藤正義文庫蔵の謡道歌集（書名なし）で、36首を収録する。どちらも福王系のもので両者に共通する歌もあるが、直接の書承関係はないらしい。謡道歌は室町時代から作られており、それらが江戸時代にも受け継がれながら、類似歌や派生歌を生み出すという複雑な展開を遂げている。福王流ではこうした道歌を謡伝授の場で積極的に活用していた可能性が指摘されている。

『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』11には長田あかね「江崎家旧蔵資料横山杣人より江崎欽次朗直康あて書簡・葉書十四通（下）」も掲載されている。兵庫県明石市在住の能楽研究家横山杣人（栄蔵）が姫路市在住の福王流ワキ方江崎家九代の江崎欽次朗直康に宛てた書簡・葉書（古典芸能研究センター所蔵）のうち、昭和20年9月から翌年1月までの8通を紹介する。新聞や雑誌に掲載された沼艸雨や三宅襄の能評の写しも同封されており、十分な環境が整わない中での演能のもどかしさや、新たな態勢で能楽を復興させようとする意気込みなど、終戦直後の混乱期において関西の能楽が復興し始める様子を窺うことができる。敗戦後初めて迎える正月への複雑な思いを記した昭和21年1月3日付の書簡が最後のものだが、その5日後の1月8日に杣人は71歳で亡くなっている。

長田あかねにはもう一つ「長命茂兵衛家文書（三）」（『藝能史研究』219。10月）がある。京都府立山城郷土資料館寄託の長命茂兵衛家文書の中から、南都両神事能への参勤やその他の芸能活動に関わる資料15点を翻刻・紹介する。神事能が廃止へと向かう江戸末期から明治初期の記録が中心で、年預に支給された配当米や扶持米に関する文書などがある。なお付論として「南都両神事能をめぐる金春座年預の収入―配当米・扶持米を中心に―」という考察があり、表章の論考「大和猿楽の「長」の性格の変遷」を踏まえながら、年預への江戸幕府からの配当米や藤堂家からの扶持米の実態や変動が詳しく検討されている。

『東海能楽研究会会報』21（3月）には2つの資料紹介が掲載されている。佐藤和道「鴻山文庫蔵『能囃子出勤覚』人物

考察」は『能囃子出勤覚』に名の見られる人物を整理し、簡単な来歴や該当する記事番号を付したもの。名古屋関係の他の資料に所載された人物かどうかも明示されている。林和利「【資料紹介】薩摩藩能楽資料「起請文前書之事」」は金春流宗家の蔵から発見された古文書のうち薩摩藩に関するものの紹介。慶応三年（一八六七）に薩摩藩世襲能役者の中西賀一郎が金春宗家に差し出した起請文の前書を示しながら、中西家が幕末まで金春流所属だったことがわかるとしている。

もう一つ、宮本圭造「「御家石橋」の成立と相伝の経緯」（『能楽研究』41。3月）を取り上げる。和歌山市の和歌山城整備企画課と法政大学能楽研究所の「能楽の国際・学際的研究拠点」との共催による「紀州獅子」復元（同誌掲載の山中玲子「『御世話筋秘曲』の解読と復元の記録」参照）に関連して、紀州徳川家の〈石橋〉（御家石橋）がどのように伝授されていったかを考察している。特定の資料の研究・紹介ではなく能楽史研究や作品研究でもあるが、さまざまな資料を駆使した論考なのでここで取り扱うことにする。江戸時代初期には上演が途絶えていた〈石橋〉だが、将軍秀忠の時代に復活を遂げ、様々な工夫を凝らして上演されるようになった。紀州藩でも徳川頼宣の命により寛永末年に独自の「御家石橋」が成立、頼宣自ら演じた「御家石橋」は藩お抱え役者の貴志喜大夫に相伝されたが、喜大夫は大坂での勧進能で〈石橋〉上演を強行するなどしたため、田辺で入牢させられることになる。その経緯が『田辺町大帳』などの資料で詳しく調査されている。その後「御家石橋」は十河源右衛門や徳田隣忠などの藩お抱え役者によって伝えられていくが、『御世話筋秘曲』だけではなく様々な紀州藩関係の資料によってその様子が明らかにされている。明治・大正期にも、内容は問題があるものの紀州の〈石橋〉が上演されていたことも紹介されている。

最後に月刊『観世』の見返しで連載中の「観世文庫の文書」94～105で取り上げられた資料名と執筆者を挙げておく。「天保三年日記」江口文恵、「世意深集　柳生石舟斉伝歌」深澤希望、「文政八年書上」中司由起子、「観世清親書き入れ五番綴謡本」落合博志、「徳峰筆　一休江口題頌」原瑠璃彦、「観世重成宛　金森宗和書状」中野顕正、「「采女」詞章注釈」家原彰子、「むかし名をえし者」小林健二、「「恋重荷」注釈附謡本」倉持長子、「東照宮様二百回御忌拝礼日光道中諸事之扣」天野文雄、「観世鉄之丞宛　片山九郎右衛門豊尚書状」宮本圭造、「千虎画　番組絵」黒沼歩未。いずれも興味深い資料であり、これらを手掛かりに研究が進展することが期待される。（表）

【能楽論研究】

ここ数年能楽論研究はあまり多く見出せなくなっているが、この年も同じ傾向が見られた。

飯塚大展「「能楽論」に見る曹洞五位説ついての覚書（一）―『人天眼目』を中心として―」（駒澤大学佛教文學研究20。2月）は、世阿弥以降の修道論の理論的背景に禅の教説がど

のように関わったかを検討するもの。香西精が『花鏡』や『拾玉得花』に見える語句と曹洞五位説との関係を指摘していることを紹介し、『花鏡』の「上手之知感事」にある「爰を混ぜぬとも云」の典拠が峨山韶碩の『山雲海月』とされていることから、『山雲海月』の本文などを検討している。さらに中世林下曹洞宗において曹洞五位説受用の主なテキストは『人天眼目』だったとして、『人天眼目』の成立や日本における流布を説明している。そして世阿弥の九位説の形式が林下曹洞宗で伝授される「本参」と類似することも指摘している。曹洞宗関係の資料の紹介や検討が中心となっていて、世阿弥能楽論との具体的な関係が今ひとつ明確ではないが、続編が執筆されるはずなので、そこで検討がなされるものと思われる。

中西紗織「世阿弥の伝書に見える「声」に関する一考察（4）―『曲付次第』第七条における「息」の問題―」（北海道教育大学釧路校研究紀要『釧路論集』49。12月）は、世阿弥伝書の「声」に注目し、「声」を身体の側面から捉え直す試み。前回の『音曲口伝』に続いて『曲付次第』を取り上げている。声になる以前の「息」の重要性を確認した上で『曲付次第』の各条を紹介し、特に「音曲に息の事」で始まる第七条に注目する。この条が詞章の作曲法への留意点であるとともに演者が息を次ぐことの留意点にもなっていると指摘し、「捨て声」「息を盗む」について分析を行い、「息」と音楽性との関りを論じることで「息」の重要性を再確認している。

山吉頌平「『金島書』に見える能登の神をめぐって―「能登の名に負ふ国つ神」小考―」（『銕仙』674。10月）は、『金島書』の「海路」で世阿弥が船中から眺めた能登の景色の中に登場する「能登の名に負ふ国つ神」について考察する。『世阿弥十六部集評釈』や日本思想大系『世阿弥　禅竹』では能登生国玉比古神社や能登比咩神社が候補として挙げられるが、両社が能登郡にあるため次の文に出る地名「珠洲の岬」との関りが薄いと『世阿弥　禅竹』の頭注に指摘されているように、この二社が内陸部にあって海路から眺望できない点からも、可能性が低いことを指摘する。その上で、「能登の名に負ふ」は社名に「能登」が含まれるという意味ではなく「能登の有名な」の意と理解すべきとして、能登の一の宮である気多大社を候補として挙げる。東大寺二月堂修二会の神名帳奉読でも十二番目に気多大菩薩が読み上げられて大和でも知られており、海の近くに鎮座することからも世阿弥に強い印象を与えた可能性が指摘されている。（表）

【能楽史研究】

以下、能楽史を扱った論文を時代順に紹介する。この年は室町時代に関するものが多かった。

小川剛生「室町期の武士と源氏物語」（『能と狂言』15。7月）は、室町期の武士にとっての源氏物語について。今川了俊、細川京兆家被官の横越元久、京兆家中や守護代等による源氏物語享受の特色を明らかにし、横越元久が源氏能〈浮舟〉

を作曲した背景を浮き彫りにしている。

江口文恵「宝生大夫の京都屋敷―観世大夫家・大徳寺との関わりから」(『能と狂言』15。7月)は、宝生大夫が京都に所有した屋敷が、観世宗節によって大徳寺に寄進された経緯を詳らかにした論。文正元年(一四六六)の大徳寺文書によれば、大徳寺の末寺である「妙覚寺」が廃寺となった跡地に宝生大夫および宝生又四郎の屋敷があったことが分かり、この場所は当時密接であった観世の屋敷や、後援者である山名持豊や室町御所にも程近かったという。しかし応仁の乱後、歴代宝生大夫の地方進出が進むにつれて屋敷の地代が滞納されるようになり、小宝生の兄として問い合わせを受けた宗節が、妙覚寺跡地屋敷の寄進という形で大徳寺に返納したのではないかと推測している。

天野文雄「弘治三年の駿府の「観世大夫」は宗節か―戦国期における観世座の地方下向望見」(『能と狂言』15。7月)は、弘治三年(一五五七)に観世元忠(宗節)が駿河に滞在していた可能性を示唆した論考。弘治三年二月二十二日に駿河浅間社の祭礼に来た「観世大夫」(『言継卿記』)は、従来は観世十郎大夫のことと解されてきたが、諸史料において十郎大夫が「観世大夫」と記された例はなく、元忠が「観世大夫」と呼ばれていることや、元忠と十郎大夫がしばしば同一行動をとっていることを指摘。『言継卿記』の記事は、観世元忠と十郎大夫兄弟が、座衆を引き連れて駿河に滞在した記録と解釈する。さらに元忠の地方下向についても概観し、観世座と家康の関係は弘治三年に始まる可能性にも言及している。

同じく天野文雄「能苑逍遙(六九)寛正五年五月一日の薪猿楽関係記事再読」(『おもて』131)は、春日社の記録である中臣祐識自筆『寛正五年社記』に基づき、寛正五年五月一日の猿楽関係記事を読み直した論。同記事は『能楽源流考』に引かれて以来、音阿弥を父とする「金三郎」なる役者の記述が不可解とされてきたが、『寛正五年社記』には「全三郎」と記されていると指摘し、これを「全(また)(又)三郎」と読み解く。その上で再読した記事から、春日社家では越智観世座を観世座の正統、音阿弥と観世大夫又三郎の座は庶子とみなしていたことを明らかにする。また、音阿弥が「老骨数番可沙汰事、難叶候」と訴えていることにも触れ、壮健ぶりを称賛された音阿弥のもうひとつの「現実」を伝える記事として注目する。

また天野文雄「能苑逍遙(七〇)観世小次郎信光と五世観世大夫之重」(『おもて』132)は、『観世小次郎画像賛』の「鸞膠続絃」の解釈をめぐる論考。これまで信光の「再婚」と解されてきた同文は、「代々の芸を次代へ継承させる役割を果たした」という堀川貴司氏の解釈を採るべきとの立場を示し、その理由を父の後者のために「推譲」したという序文と呼応するためとする。すなわち、従来は若年で五世を継いだ之重を信光が年長者として補佐し、観世座の危機を乗り越えたと考えられていたが、近年表章氏によって解明された信光の生年を踏まえると、「文明二年に四世又三郎が没した時点では、弟の信光のほうが後継者にふさわしかったが、信光は長幼の

序を重んじて五世を兄之重に「推譲」し、自分は大鼓役者の道を選んだという事情が推測される」からだとする。

また月刊『観世』は、「音阿弥・没後五五〇年」という特集を組み、五本の論文を掲載した。松岡心平「音阿弥の生涯（一）―足利義教と音阿弥―」（8月）は、足利義教と音阿弥との関係について。後小松院への院参や、貞成親王による猿楽の宴、青蓮院義円が貞成親王のもとで御香宮祭礼猿楽を見物した際の逸話に基づき、義教による猿楽肩入れの様子を詳らかにしている。同「音阿弥の生涯（二）―足利義教から義政へ―」（9月）も、足利家と音阿弥の関係について。義教の介入で醍醐寺清滝宮楽頭職が世阿弥から音阿弥へ譲渡されたことや、醍醐寺御成能の開催、義教没後の勧進猿楽市場をめぐる競争、管領畠山持国による援助について述べている。

小川剛生「晩年の音阿弥―仙洞演能をめぐって―」（10月）は、音阿弥晩年の仙洞演能について。観世文庫蔵『猿楽故実』に見える、寛正五年から文正元年の仙洞演能の記事について検討し、それが義満・義教の先例を襲った、足利義政の権力形成行事の一つであったと指摘している。

桜井英治「貴人に連なるということ」（11月）は、寛正五年の糺河原勧進猿楽について。幕府の財政難が勧進猿楽推奨の動機となったことや、貴賤雑居をめぐる言説を紹介するとともに、勧進猿楽が貴人に連なる喜びの感情を利用した装置であったことを、奉加帳や茶器等の例とともに示している。

『鐵仙』の研究十二月往来の能楽史研究は二本。宮本圭造「その後の暮松新九郎―難波のことも夢のまた夢」（11月）は、豊臣秀吉に能の手解きをした暮松新九郎の晩年について。東北大学附属図書館蔵「三春藩秋田家文書」のうち、秋田城介実季が編纂した型付の原資料に「暮松宗白」なる人物が記されていることに着目、その内容から、秋田城介と交流のある能役者であった可能性を指摘する。さらに暮松宗白は晩年の暮松新九郎で、宗白が宝生大夫重勝の型に言及しているのは、能大夫を勤めた神田明神神事能の役者仲間から知見を得たためかと推測している。

松岡心平「山名宗全の勧進猿楽」（12月）は、文安元年に山名持豊（宗全）が主催した宝生大夫勧進猿楽を例として、中世の勧進猿楽が具体的にどのように行われたかを明らかにした論。『建内記』の記事に基づき、万里小路時房と桟敷買得の依頼に来た月輪基賢とのやり取りや、四条隆夏に買い取られた桟敷に占有者の札が打ち付けられる様子、会場の広さや観客数等を詳らかにしている。

次に、近世の能楽史。『観世』は、前年に続いて「徳川家康の政治戦略と能」を連載した。宮本圭造「⑤天下人への道と聚楽勧進能」（1月）は、慶長四年に徳川家康が観世大夫身愛に張行させた聚楽勧進能についての論。この催しは、天下人家康の威勢を誇示し、武家政権の後継者として公儀の勧進能を主催しうる立場にあることを示すべく企画されたことを指摘し、関ヶ原の合戦後、諸大名が家康の歓心を買うために身愛に接触していた様子を紹介している。

同「⑥〈源氏供養〉を忌む家康」（3月）は、豊国神社能の中止と、徳川氏への政権移行について。駿府詰めを命じられた四座役者の活動や、家康が子に能の稽古をさせたこと、最晩年の演能で〈源氏供養〉を変更させている事実に触れ、徳川氏に通じる源氏の供養は不吉と考えたためかと推察している。

また二十五世観世左近記念観世能楽堂開場にあたって掲載された、岡本哲志「銀座の町と座―観世大夫が代々暮らした土地の履歴―」（6月）は、銀座開発の歴史と、弓町にあった観世拝領地の様子について。様々な技能集団が住んだ様子と、観世屋敷の土地事情を、古地図や沽券図から紹介している。

能面については二本。宮本圭造「金春家本面の復元」（『能と狂言』15。7月）は、江戸時代の金春家本面の全容解明を試みた論文。室町・戦国期に多くの古面が金春家に所蔵されていたことや、江戸時代の本面三十八面と替面二十三面の内容を明らかにし、明治期に流出した伝来面の多くが諦楽舎を経て東博の所蔵になったが、その他は大正五年の入札会で出品され、行方不明となったことを確認。その流出した本面を探索すべく、「写し」の比較によって金春家伝来面を検討し、東博蔵の伝来面は三光尉・大天神・大飛出・曲見・小尉など十面足らずが本面と認められるとの結論に至る。また東博以外では、僅かに消息が辿れる小面・般若・山姥・中将、失われた喝食・あやかしについても考察している。

保田紹雲「補遺・越前出目家の系図の謎解き（上）―越前出目家各代の名前の混乱」（『名古屋芸能文化』27。12月）は、同氏『越前出目家の系図謎解き』（平成26年3月）の補遺として発表されたもの。出目家各人の名前に関することを、混乱の原因から解きほぐし、元利家の資料や種々の『大野出目家伝書』に基づいて訂正を加えている。

最後に、近代能楽史に関わる論文を四本挙げる。佐藤和道「鴻山文庫蔵『能囃子出勤覚』人物考察」（『東海能楽研究会年報』21。3月）は、名古屋の観世流太鼓方平井氏が明治期に出演した番組を記した『能囃子出勤覚』に見える役者の一覧。各人の旧藩士時代の家禄・職藉・流義・居住地なども明らかにしている。

飯塚恵理人「大正から昭和戦前までの観世流謡曲免状の発行」（『東海能楽研究会年報』21。3月）は、大正から昭和にかけての観梅問題と免状発行に関する論。戦後に知立市で謡曲を指導していた素封家山田清氏の観世流免状を紹介し、その取得時期が観梅問題と重なることから、宗家にとって免状料が大切な収入であったことを背景に、六年間に重習を含む九枚もの免状を得られたかと推察している。

細谷由希「明治期における岩倉具視と池内信嘉の能楽保護・振興施策」（『音楽芸術マネジメント』9）は、岩倉具視と池内信嘉の能楽保護活動の違いを、文化政策史研究の視点から考察したもの。岩倉が天覧能を契機として、能楽堂の整備や「能楽社」の設立、歴史調査等を行ったことを挙げ、賓客が鑑賞するのにふさわしい日本固有の芸術という役割を能楽に与えた一方、池内は、「能楽倶楽部」の設立や『能楽』

の創刊、「能楽文学研究会」の発足等を通じて、能楽界自体が自立できる体制の整備を目指したという。これにより、岩倉は能楽を復興・保存しようと努めたのに対し、池内は創造・発展および振興・普及を図ろうとしたと分析している。

徐禎完「近代日本と植民地能楽史の問題―題の所在と課題を中心に―」（『文学史の時空』。11月）は、近代および植民地朝鮮の能楽史研究に対する提言をまとめたもの。植民地における能楽研究は、内外の歴史的・政治的・時代的作用まで見極めることが必要で、支配者と被支配者という二項対立ではその動態を捉えられないとした上で、能楽が日本社会で階層を保証する文化装置として機能していたことから、在朝日本人社会に、能謡を嗜む中流・上流階級と、能謡とは無縁の下流日本人階級があり、その外縁に朝鮮人社会があったと指摘する。また近代的学問研究の先駆けとして重野安繹・久米邦武著『風俗歌舞源流考』を挙げ、「修史」とも言える歴史的・理論的正当化作業を通じて、国家芸能としての能楽の位置付けを打ち出した点に意味があったと評価している。（小室）

【作品研究】

作品研究は本年も例年と同様に様々な論が発表された。能楽学会『能と狂言』（15。7月）には作品研究に関するものとして、投稿論文のほか、大会企画「『源氏物語』と能―享受と創成―」と世阿弥忌セミナー「室町後期の能を考える―信光・長俊・禅鳳―」の講演をまとめた論文の計四本が掲載された。まず、その『能と狂言』の『源氏物語』に関わる論文から紹介する。高橋亨「能の構想力と『源氏物語』」は、『源氏物語』において、語り手による地の文が登場人物の心内語や会話文へと連続的に移行し、逆に心内語や会話文が地の文へ移行する表現や、現在に位置する語り手・聞き手と過去の物語世界や物語主人公たちが境界領域を媒介に鏡像関係にある構想を「語りの〈心的遠近法〉」と定義。夢幻能では、シテとワキの会話文が地謡へ連続していく表現や、ワキとシテが相関し、異界と現世を往還する構想が、「語りの〈心的遠近法〉」をより純化したものになっていることを論じる。

藤原克己「能作者の観た空蟬と落葉の宮」は、『源氏物語』研究の視点から〈空蟬〉と〈京落葉〉の主題を考察した論。能では『源氏物語』の主題である零落する女の人生のわびしさや生き難さを描かないとしたうえで、『源氏物語』の女性を夢幻能形式では妄執と成仏得脱の構図にあてはめざるをえないのかと問題提起をする。〈京落葉〉については、シテ落葉の宮には柏木への思いと満たされなかった結婚生活への未練の思いがあること、一曲の主調をなすのは小野の山里の秋の寂しさにあることを指摘する。大会シンポジウムで田口和夫氏から出された「夕霧の求愛を「拒否する女としての落葉の宮の心が、この能の主題」（「拒む女〈落葉〉―『源氏小鏡』から―」『能・狂言研究―中世文芸論考』所収）との反論には、これは『源氏小鏡』の利用如何に関わるものではなく、能の詞

章の解釈に関わる問題であると答える。次にとりあげる「源氏物語研究と能楽研究」でも源氏能の諸説が並立する状況が指摘されており、まだ考察の必要な作品があることに改めて気づかされた。

山中玲子「源氏物語と能楽研究」では、能楽研究が源氏能の考察において『源氏物語』をどのように位置づけてきたのか、研究史と源氏能の問題点を論じる。「源氏物語と能に関する古いスタイルの研究」「作品研究の深化と注釈書への注目」「諸説の並立」「源氏物語研究と能楽研究の接近」「文化史研究の蓄積」「素人作の源氏能」「能役者宮王道三と源氏能」の各章題からも内容と問題点が明確に見えてくる。『源氏物語』の梗概書・注釈書・寄合語等に目を向けた研究や、作者考定や成立年代推定などを厳密におこなうようになった研究の変遷をおさえ、源氏物語研究と能楽研究が接近した新しい手法の研究、両研究の文化史の視点から素人の武家文化人の作者研究や源氏能との関わりを述べる研究など、源氏能研究の広がりと深化を指摘する。また素人作の源氏能については、著者自身の新たな考察もなされている。素人文化人の作った能では、舞にふさわしい人体として落葉の宮や朝顔、空蟬といった、はかない植物の名前の女性が選ばれやすかった可能性を指摘し、源氏能のシテには偏りがあり『源氏物語』中の重要度とは一致していない理由の一つとしている。前掲した藤原稿には、夢幻能形式の源氏能では女性を妄執と成仏得脱の構図にあてはめざるをえないのかという問題提起がなされていたが、右の指摘はその答えの一つにもなり得るのではないだろうか。

『能と狂言』所収ではないが源氏能の作品研究であるので、倉持長子「能〈野宮〉の「車」と「月」」（『明星大学研究紀要（人文学部・日本文化学科）』25。3月）を続けて紹介しておきたい。倉持氏には山中稿で「源氏物語の深い理解に基づく作品分析」と評価されている〈浮舟〉や〈木霊浮舟〉の論考があり、今回取り上げるのも『源氏物語』の読みを積極的に能へ落とし込む研究である。〈野宮〉の「花車」・「物見車」・「車争ひ」に注目し、まず「花車」は衰えの兆しを有しつつも、光源氏との恋に身を投じようとする御息所の姿の象徴と解釈する。『源氏物語』葵巻では、「物見車」には源氏を見たいという女たちの執心と源氏からの処遇の在り方を表す意味があること、「車争ひ」は御息所が物の怪となる契機となっただけでなく、源氏を一目見たためにさらに恋心を深める契機となった事件であることを読み取る。これらをふまえて〈野宮〉の「花車」に乗って現れた御息所が「車争ひ」の結果、自らの「物見車」の「力もなき、身の程」を思い知らされ妄執に苦しむことになったという展開を明らかにする。また、葵巻と賢木巻では御息所がそれぞれ「車」と「野宮」の空間で源氏を待ち、目にした後に恋心を深めるという共通の構造が指摘でき、〈野宮〉において車争いと野宮の別れが二重写しに描かれたのは、右の物語の構造を表現しようとしたためとも述べる。さらに『源氏物語』賢木巻で「月」と源氏が一体と

なって野宮を訪れ、源氏は「月影」そのものに重ねられているという「月」の在り方が〈野宮〉に意識されている可能性をあげる。〈野宮〉の中入前から後場では、「月」と連動する形で御息所の「昔」の思い出が展開し、「車争ひ」の屈辱や源氏の野宮来訪も源氏を見たゆえに恋心を深めた御息所の「昔」という同一レベルに統合されるために、御息所は「月」に向かって懐旧の舞を舞うと読み解く。

再び『能と狂言』に戻る。世阿弥忌セミナーの講演をまとめた石井倫子「金春禅鳳の文化的背景―作品と伝書から―」は、伝書に見える禅鳳の志向と作品の間にある差異に注目して禅鳳の文化的環境を解き明かす。禅鳳作品の特徴として、①唱導の場を背景に持つ素材の重用、②修験道・陰陽道的素材への関心の強さ、③男女二体の出物による舞事、④子方の活用、⑤風流アイの活用、⑥先行作のモチーフの本歌取風摂取、⑦信光への対抗意識をあげ、一方、伝書に見える禅鳳の志向は、風流能よりも典型的な夢幻能に強く向いていたとする。このような作品の特徴と志向の差異は、粟田口勧進猿楽など、場に相応しい能を作り演じることが求められていた禅鳳の状況に拠るところが大きいと指摘。また伝書で禅鳳が弟子に語った話には、比喩として花・茶・連歌等様々な芸道が引き合いに出されていることや、禅鳳が当代を代表する歌人や連歌師と交流していたことから、禅鳳の作品が「散文的で詩情にとぼしい」理由を「古典文学的教養の限界」に求める従来の説には無理があるとして、禅鳳作品の評価の再考をうながす。

『能と狂言』の中野顕正「能《当麻》の主題と構想」は、〈当麻〉に見える仏教用語や経文の文句に注目し、浄土信仰の経典、時宗教団の伝承や法語集等など仏教資料における意味や当時の理解の検討を通して主題と構想を論じていく。本曲の曲舞には本来、曼荼羅完成までを描く長大な謡物であったことを想定する先行研究（表章「当麻」『能・狂言必携』）があるが、曲舞の「来迎」およびその因と目的を浄土教及び時宗資料などから分析し、罪障深き女人の中将姫が口称念仏の功徳により阿弥陀仏に救済されるという完結した物語になっているとする。後場の主題については、「却来」と表される中将姫の出現と、一遍のイメージが投影されたワキに経を手渡すことに着目し、仏教資料の記述を踏まえて、衆生済度のために出現した中将姫が経典を僧に伝授することで、末法の民衆を救済するように命じる物語であると指摘する。これら曲舞の主題「罪障消滅」と後場の主題「念仏の末法弘通」は、部分的なものではなく、前シテ登場場面や詞章に謡い込まれた経文の解釈によって、一曲を通した二大主題として機能していること、最初は救済される立場にあった中将姫が、往生後に衆生済度のために出現したことを明らかにし、「念仏を介した救済の連鎖の物語」と全体の主題をまとめる。

『観世』では前年の観世信光没後五百年の特別企画「華やかに、劇的に、観世信光の世界」から引き続いて、信光作品の特色を考察した岩崎雅彦「元祖《ヴィジュアル系》、信光」

（3月）が掲載された。〈船弁慶〉においては平家一門の恨みは主題ではなく作品の枠組みとして用いられていること、平家の怨霊を「明るく軽く、面白く見せる」工夫を凝らしていること、ワキ弁慶を舟の作リ物から動かさずにシテと戦わせるのが曲の特徴であり演出の工夫であることを指摘する。世阿弥と信光の役者としての立場の違いにもふれ、世阿弥作の〈弓八幡〉では八幡信仰が政治的・歴史的要素として描かれるのに対し、〈紅葉狩〉では八幡信仰がエンターテインメントに取り込まれているとする。同じく『観世』には『道成寺縁起絵巻』の特徴を解説する、徳田和夫「能と説話・伝承『道成寺』をめぐって―『道成寺縁起絵巻』の周縁―」の連載もあった（6・8・10・12月）。

『鋳仙』の「研究十二月往来」には興味深い論が多くあった。伊海孝充「能の敵討ち物における「本望」」（666。1月）は、「本望」「本望を遂ぐ」の言葉が敵討ち物の能に特有であり、敵討ち物を象徴する言葉であると言う。現在のように強い願望や望みが達せられた喜びの表現として「本望」が使われる用例が能にはなく、「敵討ちの達成」という限定的な用法にとどまっているという指摘は興味深い。『曽我物語』真名本・仮名本ではほぼすべて敵討ちの執心が「本意」と表現されていること、「本望を遂ぐ」の用例が軍記物語では僅かで、幸若舞曲に散見できることといった、「本望」と「本意」の使用分布状況に能の曽我物を置くことによって、作品の成立背景の手掛かりが得られるとする。佐藤三男「『九院仏閣抄』のなかの阿古屋の松」（667。2月）は、比叡山延暦寺で記された『九院仏閣抄』の「當山九院定事」後半、西塔院が九院に含まれる理由を説明する中に、阿古屋松の実方説話が記されていることを指摘する。この説話が地域の区分けに関わる例え話として用いられている点に注目し、阿古屋松の説話が区分けの例え話の定番となっていた可能性をあげる。岩崎雅彦「たれ踏みそめて恋の道―「恋重荷」の恋の歌―」（669。4月）は、〈恋重荷〉中の和歌をていねいに検討し、和歌の世界では機知のあるユーモラスな表現として「恋の持夫」「恋の奴」の言葉が使われてきたと指摘。このような「俳諧歌的要素」が盛り込まれている点が〈恋重荷〉の特徴であることを導く。重田みち「「夢幻能」のフィルタを外す―世阿弥晩年期以降の幽霊能のヴァリエイション―」（671。6月）は、シテが僧や修験者と接触して現実にその助けにより成仏、または成仏を願う筋を持っている〈葵上〉〈船橋〉等の能を「現能」と定義、〈松風〉〈井筒〉等の夢のプロットを持つ作品を「夢能」と位置づけ、両者が「夢幻能」概念という近代的フィルタを通して混同されてきたとする。そのフィルタを取り除き、世阿弥が活動していた時期の「現能」「夢能」の基本形やワキの役割と、世阿弥晩年期以降の作品を比較することによって作品成立に関わる問題を解明できることを指摘する。天野文雄「『殺生石』と源翁禅師の事蹟」（672。7月）は、後小松天皇が殺生石を救った源翁の功績を称えて禅師号を下賜した伝承の検討を通して、伝承に見える源翁の事蹟が玉藻前の物語

と結びつき〈殺生石〉が成立したこと、〈殺生石〉は玉藻前救済の能であると同時に、高僧源翁の事蹟の能としても受けとめられていたことを明らかにする。天野氏の『おもて』掲載の二本の論もここにあげておく。「《葵上》における「生霊」御息所の描かれ方」（133）は、御息所の生霊が巫女にしか見えないという設定にふさわしい演出が意識されてきたことを型付から考察する。「《経正》の作者について」（134）は、〈雨月〉との類似点から禅竹作の可能性を指摘したもの。

竹本幹夫「現行非所演演目と室町期地方猿楽の独自演目―丹波猿楽の例をめぐって―」（『国文学研究』182。6月）は、矢田座・日吉座・梅若座の室町期の演能記録を精査し、江戸期以後の四座の演目になっていない曲を摘出、それらの曲について環境や伝来、上演の実態を検討し、各座独自の演目といえるのか、世阿弥的な作風との違いを明らかにする。同じく竹本氏の「世阿弥周辺の能三題―〈野守〉〈采女〉〈雲林院〉」（『国立能楽堂』404。4月）は、表題三曲の成立に関わる論。〈野守〉が世阿弥最晩年の作であること、元雅や十二五郎康らのために作られた可能性のあることをいう。その前提として、同じく力動風鬼の〈鵜飼〉について『申楽談義』諸条の解釈に基づいて、世阿弥の力動風鬼の初演であること、それが正長二年の義教台覧猿楽にあたる可能性を示す。〈采女〉においては、〈采女〉自体に「飛火」の語が一度も用いられないにも関わらず、『五音』下に前場のワキとシテの応対の謡が「飛火」の名で所収されることや、そもそも『五音』「飛火」の内容が春日野の異名に「飛火野」があることを意識させないものになっていることなどが、作者考定の問題点となっていると提起する。〈雲林院〉の改作については、世阿弥が花守の老人を前シテに設定し、複式夢幻能の形に直して自筆本の形とした後に、この自筆本を所持していた禅竹が現行の〈雲林院〉に改訂したことを想定する。ここで竹本稿と同様に『申楽談儀』「面のこと」を出発点に力動風について論じた三宅晶子「力動風再考」（『銕仙』670。5月）をあげる。『申楽談儀』諸条を検討し、観阿弥の時代からすべての地獄の鬼が荒々しい演技だったわけではなく、馬の四郎の優美な鬼や光太郎の砕動風鬼の演技もあったこと、それらを観阿弥が京都進出にあたって工夫の一つとして取り入れたこと、つまり観阿弥の鬼が「鬼の幽玄化」という点で他流の力動風と異なる特別なものであったことを指摘する。応永三十年までの間に「幽玄的歌舞能理論」の体系化が完成、観阿弥の芸はすべて幽玄に統合できるという「力動の概念の変化」が世阿弥の中であり、力動風を念頭に入れなくてもよい鬼能が完成された可能性をあげる。

小田幸子「音阿弥が演じた能」（『国立能楽堂』407。7月）は、音阿弥の上演記録を検討し、①オールラウンドの役者、②怨霊・鬼・異類が多い、③多彩な人体、④現実の場に出現する霊的存在という、音阿弥の芸風と上演曲の特色をあげる。①から④の特色が寛正期の新作の傾向と重なること、この特色を有する音阿弥晩年期の上演曲が、世阿弥以来追究されて

きた歌舞能や女体能、現在能に加わり、寛正期のレパートリーが充実度を増したことを述べる。寛正期に世阿弥以降の形式等を受け継ぎつつも、新しい傾向を持った能が記録に現れることを疑問に思っていたが、能作における模倣と創造の問題を考えるうえでも本論は示唆に富んだものといえる。

小林健二「能《烏帽子折》の祝言性」（『国立能楽堂』409。9月）は、牛若の元服が縁者によって祝われる点に祝福の構図が見えること、能よりも幸若舞曲「烏帽子折」の方が祝福の意図がより明確であること、熊坂の退治は義経の初陣であり元服の門出という祝言の意味があることを述べる。大谷節子「面白の美学」（『聚美』22・23・24・26・27。1・4・7月、2018年1・4月）は、これまでの自身の作品研究の成果をふまえ、五回にわたって〈高砂〉〈敦盛〉〈井筒〉「物狂能〈柏崎〉〈弱法師〉」〈恋重荷〉について、世阿弥伝書や素材を検討し、構成と詞章を丁寧に解読、作者が作品に潜ませた工夫や主題を明らかにする。江戸時代の番外曲を取り上げた、大山範子「〈研究ノート〉謡曲《書写鏡》について」（『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』11。6月）は、諸本比較や典拠の検討等をおこなった論。（中司）

【演出・技法研究】

前項「作品研究」との厳密な区別は難しいが、演劇学的視点の論、演出および技法に関する論を以下でまとめて扱う。

竹内晶子「語りとセリフが混交するとき：世阿弥の神能と修羅能を考える」（『能楽研究』41。3月）は、演劇学やナラトロジー（物語論）の理論を援用して、世阿弥の神能と修羅能における前場・後場の結末部を分析し、ナレーションのあり方とジャンル形成との相関を説く。演劇を構成する「内世界的コミュケーション」と「舞台・観客間コミュニケーション」という二つの異なったコミュニケーションのことや、「ナレーションに備わる絶対的な「権威」」のことなど、能の観客なら誰もが漠然と感じている（あるいは「言われてみればそうだ」と納得する）ことだとは思うが、それをしっかりした基盤のある理論や方法によって明快に腑分けしてみせてくれる点がありがたい。能の作品研究が広く演劇学や他の学問と結びついていくためにも、こうした理論に自覚的でありたいと思いつつ読んだ。神能の場合は「治世に対する祝福・賛美という宗教的メッセージ」にナレーションの権威が利用され、一方、修羅能ではナレーションではなくキャラクター同士の内的コミュニケーションが重視されているという指摘も首肯できるが、世阿弥はナレーションの「使用・非使用」を「それぞれのジャンルの宗教的機能と連動させて選択した」と言われてしまうと、それほど明確に分けられるのかと疑問も感じる。「宗教的機能」の定義がよく判らないせいもあるのかもしれない。また、修羅能と神能についてそのような差異があるのなら、女能は？鬼能は？と先を知りたくもなる。他ジャンルまで広げての続稿を期待したい。

同誌にはほかに、演出関係のものとして、山中「『御世話

筋秘曲』の解読と復元の記録」と、秋田城介型付研究会（江口文恵・中司由起子・深澤希望・柳瀬千穂）編の「『秋田城介型付』索引」が載る。前者は、能楽の国際的・学際的研拠点の企画「紀州獅子の復元」に関するもの。「資料研究」の項で触れた宮本「「御家石橋」の成立と相伝の経緯」（204頁参照）とセットになっている。基礎資料とした『御世話筋秘曲』（享保三年奥書。梅若玄祥（現実）氏蔵本の複写）および『能・囃子習事関係伝書』（寛延元年奥書。同じく梅若氏蔵本の複写）の解読と実演までの過程を記録する。また、〔獅子〕七段の三種の舞い方については明確に難易度の差があることを確認し、二十一通りもの組み合わせを用意する理由として「不達者」でも舞えるようにという配慮が書き留められているのは、玄人の役者ではなく藩主が舞うことを前提としていたからであろうと推定している。紀州獅子で工夫されたと見える「乱序」の原型については他の考え方もあったと考えている。後者は、能楽資料叢書3『東北大学附属図書館　秋田城介型付』に見える人名や曲名と、演出技法関係語句の索引。あらためて所作関係の語句を眺めるだけでも、「泣く・転ぶ」等の古風な用語、「タイハイ・ヨセイ」等複数の意味で用いられている用語、「見る」ことに関する動作の多さなど、気になる点は多い。型付本編とこの索引を活用して演出・技法研究がさらに盛んになってくれることを願う。

『銕仙』には演出・技法関係の論が一本。高桑いづみ「長唄に聞く能の古態」（『銕仙』673。9月）は、昨今、長唄囃子の研究も進めている同氏ならではの論。長唄の獅子物の三味線に能管の古い譜に併せたと思われる演奏が残っていること、能の大ノリ謡を取り入れた長唄には近古式の当タリを残す例（鶴亀）や、能の古い謡い方を残している例（京鹿子娘道成寺）があることを示し、長唄を通して能の古態を探る研究手法の可能性を提示する。

近代の能楽技法の確立に関しても複数の成果が発表された。高橋葉子「近代能楽観世流のフシの統一――ウキをめぐって――」（『日本伝統音楽研究』14。6月）と「謡本から見た梅若家と観世喜之家―近代観世流の節付改革」（『武蔵野大学能楽資料センター紀要』28。3月）は一対となる成果。前者は、明和改正謡本に「ウ」と明記される「ウキ節」すなわち「ヨワ吟の中音フレーズ内で一時的に音を浮かせ、再び中音に戻るフシ」について、謡伝書『そなへはた』の記述や近代刊行の謡本と詳細に比較検討し、このフシが大正期までは謡われており、観世元滋刊行の「大正版観世流謡曲正本」において廃止されたことを明らかにする。謡のフシの変遷それ自体を知る面白さはもちろんだが、たとえば謡本の節付について「章譜は基本的にシラブルを示し、またその向きや形によって音の動き方のイメージを表すものでもある。上・下等の記号は上音・下音等の音位とその音を核とした音系（音域）を示し、旋律の骨格を示すものである」というような、事象の整理がところどころにあり、文学方面から能に近づいた者にはなかなかハードルの高い音楽上の問題を判りやすく整理する

手際のよさに感服した。後者は、この「ウキ節」をはじめ複雑な様相をもつ「ウキ」の謡本表記に注目し、観世流改訂謡本刊行会による多くの謡本、元滋による謡本、大成版、梅若流謡本等における記述を精査したうえで、現在の観世流大成版に見られるようなすべてのウキの記入は、刊行会の「解説参考謡本」（参考本）によって方向付けられ、昭和5年から刊行の始まる「梅若流謡本」によって決定づけられたとする。また、「ウキ節」の謡本への記入の廃止も、参考本によるものであることを示し、そこには、観世喜之の「強い理論志向」、「謡の近代化」への強い志向があるとする。家元や分家の当主など、リーダーが自覚的に近代的な謡をめざしていったこと、謡の技法の統一に向かう意識が謡本の節付の整備・統一を促進したことなど、次の横山稿が扱う「型」の問題とも通じる重要な指摘と思う。ただ、参考本におけるウキ節の廃止と「参考本でイロやアタリが多く削除されたこと」を併せて、喜之が「細かな音程操作や装飾的な彩りよりも、直線的で簡潔な謡を好んだのだろう」とする点には多少の疑問を感じる。外面的、装飾的な、結果として付いてくる節を規範として謡本に書き込むのを拒否することと、そういう装飾的な謡を好まないことは、また別のことのようにも思うのだがどうだろうか。

横山太郎「近代能楽のわざと表現（一～四）」（『観世』5・7・9・11月）は、「シテの身体的な技術や表現」つまり「型」についての論。明治の三名人（梅若実・宝生九郎・櫻間伴馬）から、明治初期生まれの観世清廉・梅若万三郎・喜多六平太の時代を経て大正時代の観世元滋や喜多実まで、当時の文献に見える型の描写や理念を精査し、近代における能の身体表現そのものと、そのあるべき姿について語る言説との間に「言行不一致」とも言える乖離があることを明らかにする。また、世阿弥伝書に記された例を挙げつつ、そもそも「能の身体の核心」には「積極的な意味での臨機応変性」が在ったことを示すとともに、そうした臨機応変は近代の能楽においても、喜多六平太たちの時代までは受け継がれていたことを示す。そのうえで、「既定の型を守るべし」との、実態とは異なる芸談が語られたのは、幕府の式楽としての規制や枠組みが失われた明治以降、「時折の逸脱を含みながら能が能であることを失わないための条件」としてそのような理念が必要だったからではないかと想定する。この連載は翌年3月まで続き、江戸から明治への転換、流儀の型付の発生などについて、さらに考察が深められるのだが、本年掲載分だけでも、先述の高橋稿での問題意識と響き合うものが多くあり、興味深かった。現在の能楽に直結する「近代の能楽」の研究がさまざまな方向から進められることに期待したい。（山中）

【狂言研究】

まず資料紹介・資料研究から。坂本清恵・川上真由子・林美樹・シラージ アンドレア「大蔵流茂山家狂言台本翻刻」

（『日本女子大学大学院文学研究科紀要』24。3月）は大正から昭和初期筆の日本女子大学日本文学科蔵「大蔵流茂山千五郎家台本」二十七冊のうち、鶏猫・二十九・呂蓮・長光の翻刻。小谷成子・佐藤友彦・田﨑未知・野崎典子・林和利・安田徳子・米田真理「狂言共同社『秘傳聞書』翻刻（八）」（『名古屋芸能文化』27。12月）は、和泉流山脇派の伝書『秘傳聞書』の翻刻の連載。今回は「秘傳聞書　肆」ノ上の後半部分の翻刻。栗焼・恵比寿毘沙門・恵比寿大黒・清水・鎌腹・以呂波・祐善・釣狐・俊寛間・三番叟などに関わる記事。飯塚恵理人「佐藤友彦師蔵九冊本問狂言「詠之類」」（『椙山女学園大学研究論集 人文科学篇』48。3月）は佐藤友彦師蔵九冊本問狂言の翻刻の六回目。今回は殺生石・世界・車僧・大佛供養・現在鵺・羅生門・土蜘・長郎・二人祇王・守久・橋弁慶・大原御幸・鉢木・摂待・鶴亀・皇帝・鞍馬天狗・夜討曽我・大会・舎利の翻刻。藤岡道子「『狂言古画帖』再検」（『東海能楽会年報』21。3月）はすでに同氏が考察している国立能楽堂蔵『『狂言古画帖』の再考察。この資料が鴻山文庫旧蔵であったこと、「居杭」と考えられていた図が廃曲「水練聟」である可能性が高いことに言及する。狂言面研究もここで扱う。小田幸子「能楽講座　狂言面1～4」（『国立能楽堂』401～404。1～4月）は狂言面の紹介と分析。1は仏神面、2は人間の面・動物の面、3は異類に用いることが多い賢徳・うそふき・武悪の紹介。4は登髭の用途の広さ、〈菌〉〈首引〉などのように一曲の中で多くの面を用いる演出、〈清水〉〈仏師〉のように化ける演技と面の関係などを考察する。なお「能楽講座　能・狂言面余説1」（『国立能楽堂』407。7月）には「まちがいの狂言」における面の利用法についても言及がある。

この年は狂言の特集を組む雑誌が多かった。『國文學（関西大学）』（101。3月）には、関屋俊彦教授古稀記念特集として狂言に関する論文が四本載る。田口和夫「和泉流改正狂言小考―三宅本・万蔵家本・藤江本紹介・検討―」は和泉流の「改正狂言」に関する考察。幕末に生まれた和泉流改正狂言は、習物とされていたこと、流派の実力者である三宅庄市自身が関わり、改正したことを指摘した上で、改正狂言台本三種の紹介し、改正曲八曲の改正のポイントを分析する。宗家系との相違、他流・他家との共通項などが見える点が興味深い。稲田秀雄「長州藩鷺流における「改作」の問題―江山本「差出祖父」をめぐって―」は長州藩狂言役者江山家本を写したと考えられる名女川本掲載〈差出祖父〉の考察。この曲は鷺伝右衛門家にはない演目であったが、和泉流〈孫聟〉をもとに〈音曲聟〉と同じ結末を残しながら、聟を祖父の孫とする独自設定を設けたり、〈二人袴〉の趣向を取り入れるなどして、長州藩で新作的「改作」がものだと考察する。こうした作業の背景として、江戸時代の中央と地方の関係、狂言役者による新作・改作作業の事情も検討する。興味深い事例だが、この曲の新作的改作の背景として考えられる具体的な事情をさらに知りたくなった。森勇太「『狂言六義』における依頼談

話の構造」は言語学の見地から、天理本の依頼表現の構造分析を試みた論。以前、同様の分析をおこなった虎明本と比較しつつ、天理本には行動を促す「依頼の表明」や聞き手の選択を担保するような「対人配慮」の要素が多く見られるなどの特徴を指摘する。関屋俊彦「新架蔵「能間」について」は、大正頃筆の和泉流間狂言台本の紹介（全十冊中七冊存。二百十五曲所収）。三宅派台本にはない曲も含むが、野村信喜間之本に近いと推測する。同氏には豊橋魚町鳥居家が所持していた和泉流狂言台本を紹介した「大阪府立中之島図書館蔵『狂言世利不』について」（『関西大学東西学術研究所紀要』50。4月）もある。野村又三郎家の台本の問題について言及されている。

『武蔵野大学能楽資料センター紀要』（29。3月）は公開講座・能楽研究講座・入門講座（テーマは「今年はひたすら狂言です。」）の記録として、六本の文章を収める。高松百香「中世の結婚と離婚―史実と狂言の世界」は嫁取婚・嫁入婚が定着した室町時代の婚姻の背景、狂言が描かない離婚・再婚の実態を解説する。岩城賢太郎「「朝比奈」という勇将―狂言〈朝比奈〉のシテ造型と近世期への展開」は『曾我物語』・幸若舞曲・狂言絵・歌舞伎などを分析しながら、シテの朝比奈義秀の人物造型、特に朝比奈がもつ大竹について考察する。松田弘之・高橋葉子「笛方が語る狂言の音楽」は対談形式で、能の囃子事は比較しつつ、狂言の笛の特色を解説する。石田幸雄・三浦裕子「狂言のなかの歌と舞」も同じく対談形式で、狂言の謡と舞の階梯、狂言歌謡の多様性、演技と歌舞の相関性を解説する。羽田昶「近代の狂言師たち―名人をたどって」は狂言の近現代史と善竹彌五郎・三世茂山千作・三世山本東次郎・六世野村万蔵の経歴・芸風を解説する。山本東次郎・井上実「狂言と映画の出逢い―一九六七年制作東映教育映画《狂言》」は〈萩大名〉と狂言概説で構成された教育映画《狂言》（東映、一九六七年）の制作余話、映像としての特色を鼎談形式で振り返る。山本・井上稿は【その他】で詳しく言及してある。

『武蔵野文学』（65。11月）は「狂言の伝統と未来」と題した特集。巻頭エッセイの山本東次郎「狂言の未来のために」は、セリフ一語一語の重要性を説く。〈月見座頭〉を男の変心ではなく、座頭の教養への嫉妬として読む指摘は面白い。馬場あき子「鬼のロマン」は〈節分〉〈朝比奈〉などをもとに、狂言の鬼の内面の脆さに人間味が溢れていること、人間の知恵や力が鬼に勝るという愉快さを指摘する。羽田昶「復曲狂言の現状と意義」は一定の評価を得ている演目〈月見座頭〉〈獅子聟〉〈眉目吉〉〈若菜〉〈呼声〉〈浦島〉〈祇園〉を中心に、復曲時期やその後の上演状況を整理する。今後、復曲過程を確認する上で便利な論である。天野文雄「大蔵虎明と萩原兼従」は唯一神道吉田兼治の長子である萩原兼従の事績と虎明との関係から、翁伝授周辺の問題点を読み解く。吉田家の『翁大事御相伝人数書』に兼従からの伝授も一部含まれること、『わらんべ草』の「これより奥」は『神道猿楽秘伝』を指し、伊

達文庫蔵『神道秘密翁大事』や山本東次郎家蔵『式三番』にも含まれていることを推測する。その他にも多くの問題意識が盛り込まれており、論旨を追うのに苦戦した。宮本圭造「狂言台本研究の現状と課題―「わきわきにて作りたる狂言」のこと」は和泉・大蔵・鷺といった主流三流以外の近世初期の狂言の動向を探る論。三流以外の台本研究の重要性、春日社頭に出勤を怠った三臈「掃部」が南都禰宜衆狂言役者として知られる「とっぱ」と同一人物で、前名を「勘丞」であったとする考察、絵画資料研究の意義などをまとめる。この時代が狂言研究において極めて重要であることに改めて気づかされる。そのほかにも小林千草の論考も掲載されている（後述）。

次に、作品研究・演出研究に関する論考をまとめる。岩崎雅彦「狂言「附子」の題材―笑話と教訓譚」（『伝承文学研究』66。8月）は〈附子〉の類話を総合的に捉えようとする論。稚児が水瓶を壊すという古雅で上品さをもつ『沙石集』、器物を壊す場面がなく素朴で単純な話となっている『啓顔録』、〈附子〉に近い時代に成立した『法師物語絵巻』の「飴は毒」と比較して、天正本「ぶすさたう」が成立した時点で、文献・口承で様々な話柄が広く流布していたことを指摘する。〈附子〉の狂言の代表曲のように見られることが多いが、これほど流布した物語を演劇化しているという点では、むしろ特異な成立過程を踏んでいる曲ともいえるのではないだろうか。大谷節子「狂言「かくすい」考」（『成城国文学論集』39。3月）は「かくすい」の意味から、この曲の趣向を考察する。三者が求婚の歌を詠む点から、本来は「斯く好い」という意であったと推測し、その「かくすい」を隠題に来る日も来る日も「すく」日常を詠むという、「雅」の和歌の世界を「俗」の世界に反転させる点に、この「をかし」があったとする。さらに虎明本が「をかし」から「めでたし」という趣向を展開していき、その影響下に虎明本の百姓狂言「かくすい」が作られたと考える。非常の面白い論であったが、それぞれが物を出し合う「各出（かくすい）」という語がある。この語と「かくすい」という曲名には何らかの関係はないだろうか。稲田秀雄「狂言に見る祇園会風流―「鬮罪人」を中心に―」（『藝能史研究』218。7月）は「特集・祇園祭（2）」の一つで、諸流台本を踏まえ、中世祇園会の反映を検討した論。諸流台本に見える山鉾の趣向は、応仁の乱以前の祇園会の実態を明確に反映していないこと、山を二つ作り、その上で鬼が罪人を責める演技は戦国期の風流から間接的に影響を被った可能性を指摘する。台本調査という研究の基本が重要であることを気付かされる論であった。考察の過程は祇園会の歴史的変遷を知る上でも有益。木村信太郎「〈鱸包丁〉成立考―天正狂言本〈うちみ〉からの変容―」（『日本文学誌要』95。3月）は語リに着目し〈鱸包丁〉の成立過程を探る。語リの特質から天正本〈うちみ〉が〈文蔵〉の影響を受け作られ、その〈うちみ〉に「口調法による持て成し」の趣向が付加され〈鱸包丁〉が成立した考察する。〈うちみ〉と〈文蔵〉の先後関係には異論もある

だろう。田口和夫「狂言〈鞍馬参〉小考」（『鍈仙』668。10月）は三点から〈鞍馬参〉を考察する。一つ目は『古狂言後素帖』の未詳曲「つしままつり」が〈鞍馬参〉であること、二つ目は天正本〈くらま参〉が「福渡し」の説話から逸脱した内容となっているが、近世諸台本はそれを本来のあり方に引き戻したと推測し、三つ目は類曲〈毘沙門連歌〉を踏まえ、〈鞍馬参〉の祝言への変貌を考察する。原田香織「狂言にみる茶の文化」（『東洋通信』543。8月）は〈鱸包丁〉〈通円〉といった具体的な茶点ての描写がある作品以外にも、狂言の中に語られる酒宴・飲食・連歌会と連動する茶や茶道具の様相を確認していく。茂山（善竹）忠亮「狂言《濯ぎ川》のもう一つの演出―武智鉄二の狂言の原点を探る試み―」（『アート・リサーチ』17。3月）はファルス「洗濯桶」を翻案とした新作狂言〈濯ぎ川〉の演出研究。故意に小袖を流す千五郎家の演技は原作「洗濯桶」を意識したもので、「中世という暗黒の時代」を描く狂言と同様の社会が見える中世ヨーロッパとを重ねる意図があったのに対し、武智鉄二のオリジナル版は武智の師である善竹彌五郎の狂言観、すなわち「善意と善意の葛藤による破局」による喜劇と悲劇の交差に基づく狂言らしさを追求した演出だったと考える。武智と彌五郎についての考察は面白かったが、「中世」という時代の捉え方に少々違和感を覚えた。野村万作・羽田昶「狂言のコトバ―野村万作師に聞く―」（『楽劇学』24。3月）は楽劇学会大会公開講演会「楽劇のコトバ―表現の多様性」における対談の記録。稽古の階梯、発声・発音について、狂言と他芸能のセリフ術の比較などに話題が及ぶ。とくに、鼻濁音についての説明は興味深い。

間狂言研究には飯塚恵理人の論が二本ある。「《野宮》試解―間狂言が示す世界」（『紫明』40。3月）は、〈野宮〉の間狂言が前提として知っておくべき『源氏物語』と野宮について解説する点に主眼があることと副言巻の異質性を指摘する。「《誓願寺》試解―間狂言バリエーション―」（同誌41。9月）はほとんどの台本が草創時や本尊の縁起を語る内容であること、副言巻だけは前場のまとめに絞っていることを指摘する。両論とも佐藤友彦氏蔵山脇得平本の翻刻に重きが置かれているようである。

国語学・言語学に関わる研究をまとめる。まず近年、成城大学図書館蔵『狂言集』（諸流の台本を集めた十四冊）に関わる論精力的に発表している小林千草の論が「大蔵流幕末期台本に見る伝統と当代性」（前掲『武蔵野文学』）と「幕末書写鷺流狂言台本の性格と用語―成城〈曲章三番〉本「伯養」「すいから」の場合―」（『言語と文芸』132。2月）「成城〈曲章三番〉本所収「因幡堂」の性格と言語」（『東海大学日本語 日本文学 研究と注釈』6。12月）の三本ある。一つ目は、同台本〈鏡男〉を考察し、特に山本家本に類似する表現からその当代性を導こうとする論。二つ目は、名女川本に近似する曲が多い同台本のうち、名女川本とは距離のある〈伯養〉〈すいから〉を分析し、セリフの独自性を考察する論。三つ目も前論と同じ手法で「因幡堂」を検討した論。また同氏「狂言のオノマ

トペ、その必然性・伝承性・当代性」（『国語語彙史の研究』36。3月）は〈柿山伏〉〈どぶかっちり〉の擬態語・擬声語に関する論で、幕末にかけてオノマトペの使用頻度が急激に増え、その中で流派の独自性、各台本における演出面の配慮、地域色が生まれたと考える。いずれも綿密な台本比較に基づく研究だが、ある台本が他の台本にない表現を含んでいる場合、それをその台本の「独自性」、もしくはそれが書かれたときの「当代性」と呼べるのかという点については、慎重に受け止めたい。狂言のオノマトペについては、山口仲美「楽器の音を写す擬音語―古代・中世―」（『埼玉大学紀要・教養部』53-1。3月）にも言及がある。狂言歌謡「一の瀬」の「くゎんこくゎんこくゎんこや」が楽器の音ではなく、「歓呼」を含む漢語の囃子言葉であり、「踊と儘」の「ちやうんうちやうんう」は中国の故事を踏まえた「千夜」「雲雨」であるとする新解釈が示されている。また〈笠の下〉の「ほっぱい」は笛の音ではなく囃子言葉、〈楽阿弥〉の「とらろ」は尺八の音ではなく、龍笛の唱歌であるとする解釈も興味深い。末森明夫・高橋和夫「狂言台本における聾唖態語彙表記の変容」（『国語語彙史の研究』36。3月）は諸流台本の比較考察を通して、〈三人片輪〉〈不聞座頭〉をもとに障害者の表記が平仮名から漢字へと変容したと把握する。「瘖・瘖痙」と「唖」に障害の区別があることなど教わることが多かったが、影印と翻刻を一緒くたに論じることの意図がわからなかった。影印（つまり原本の表記）だけで分析したほうが、表記の変遷が辿れるのではないだろうか。北﨑勇帆「狂言対照コーパス構築における問題点と対策」（『じんもんこん２０１７論文集』12月）は対照コーパス構築する時、アライメントを行う際に生じうる問題点について狂言台本を用いて考察した論。門外漢には難しい論文であったが、比較を行なっていた虎明本と虎寛本では狂言台本の性格が異なるので、こうした研究で両者の単純な比較可能なのか疑問に思った。

教育関係の論考は三本。ウィリアム　ペトルシャック・飯塚恵理人「英語圏留学生向け狂言教材の作成―「盆山」を素材に―」は狂言方和泉流佐藤友彦氏の上演台本を底本とする〈盆山〉の英訳。この曲を英訳したのには、学校図書が小学六年生の教科書に〈盆山〉を採用しているからしい。山本百合子「日本の伝統芸能教材の多角的な学び可能性と課題（1）―小学校教育における狂言教材に関する実情調査と授業研究―」（『福岡教育大学紀要第5分冊 芸術。保健体育・家政科編』66。3月）は狂言を小学校授業で取り入れる問題点と実例を論じる。最も大きな問題点として教員自体が狂言に馴染みがないこと、実演者の交流の手がかりがないことなどが挙げられているが、これらの問題点は長年挙げられ続けているものだろう。たとえボランティアでも教育現場に加わってみたという能楽師もいるので、その橋渡しをするシステムが作れないだろうか。佐藤智広「絵本化された狂言作品に関する一考察―保育指導の可能性を視座として」（『昭和学院短期大学紀要』55。3月）は狂言絵本の保育指導への活用の効果

を検討した論。狂言のオノマトペ・掛け声などは絵本に適しており、固有名詞の削除や子供に難解な内容の改変により、絵本化しやすい題材だと考え、登場人物が少ない狂言は、素話もしくはパネルシアターとして保育活動への活用を想定する。（伊海）

【その他】

■教育

教育学的なテーマの論考から。佐藤和道「国語教科書と能楽（続）」（『能楽研究』41号）は、前篇（『能と狂言』14号、2016年）に続き、戦中・戦後の次のような動向を明らかにした。戦中の古典重視の流れのなかで『中等国文』に「鉢木」「摂待」「靱猿」が含まれたが、終戦後の暫定教科書では削除され世阿弥の「年来稽古」が導入される。昭和22年度学習指導要領試案から35年度改訂に至るまで謡曲・狂言・能楽論書が指導要領の教材例にあげられ、教材として多く採用。しかし昭和45年度改訂で古典教材精選の方向となり、謡曲・狂言の採用は激減した。能楽論書（特に「年来稽古」）は評論文として教材採用が続いたが、導入時に西尾実が一般的な人生論、芸術論として位置づけた影響であることを著者は示唆する。年表・資料も豊富で、前篇と共にこの分野の研究の基礎となる論文といえるだろう。

渡邉康と飯塚恵理人は「道成寺」のアシライ物着を録音・楽譜化し、中学生にも利用できる教材作成を目指した。「能楽囃子の義務教育課程音楽課程での単元化のための教材試作「道成寺物着」をモデルとして」（『椙山女学園大学教育学部紀要』10号）は、それがアシライという日本音楽独特の概念を理解するという音楽教育上の意義をもつことを述べ、楽譜を提示したもの。

玉村恭・荻野美智江「授業で能をどう扱うか　中学校での《羽衣》の授業実践から」（『上越教育大学研究紀要』36巻2号）は、荻野の勤務校における音楽の授業での実践報告と、それをふまえた、学校教育で能をはじめとする伝統音楽・伝統文化をどう扱うべきかの考察。報告によれば、事前に所作・謡・囃子の基礎的な実践を経る、クセとキリを比較する、外部講師と連携するといった手法で、生徒が能の表現の仕組みと魅力を理解できるようになった由。以上の経験をふまえ、離れたもの（たとえば能と歌舞伎）よりむしろ近いもの（クセとキリ）を比較してみせるべきこと、「一流の外部講師」である必要はないこと、伝統音楽の通念的美学を押しつけるべきではないことなど、説得的な提言がされる。

■フィールドワーク

李明珍「日本における無形文化財芸能種目の伝承現状と伝授教育の実態　狂言と神楽を中心に」（『日韓無形文化遺産研究02』）は、韓国国立無形遺産院と東京文化財研究所無形遺産部両者間の研究交流の成果報告。現代化・都市化するなかでの伝統芸能の伝承の現状をレポートした。狂言については、歴史、流儀、制度（重要無形文化財、日本能楽会、能楽協会）

を整理したうえで、伝承・教育の体制を分析し、家元制度の師弟関係が、国立能楽堂の伝承者養成事業や東京藝術大学の教育にも組み込まれていることや、伝承者不足の厳しい現状を指摘した。総括では、世襲中心の共同体、伝承者の自負心、保護制度に頼りきりにならずに済む支持層の存在などが、韓国と比した日本の伝統芸能の特徴であることを指摘し、そこに伝統芸能を持続させる力を見てとっている。

西尾久美子「伝統文化専門職の人材育成　芸舞妓と能楽師の事例」（『現代社会研究科論集』11号）は、人材育成論の視点から、ベテランから若手までの複数に聞き取り調査、及び舞台・稽古の参与観察調査をおこない、子方から一人前になるまでのキャリア・パスと、各節目における変化に関する当事者の語りを提示。こうしたキャリア形成を円滑にする仕組みを、ヒギンズとクラムのDevelopmental Network（DN）概念を援用して分析した。これは、師弟の垂直的な二者関係だけでなく、弟子を取り巻く複数の人間関係のネットワークのこと。能楽師は技能形成途上で横や斜めのDNを構築し、それがキャリア中期以降に、挑戦的な公演など、能力発揮の場を設定してさらに成長していくための基盤になるといった考察がなされる。伝統芸能の身体技能形成と組織マネジメントを交差させた研究は著者の独壇場。理論とフィールドワークに基づくこの種の能楽研究がもっとあってよいはずだ。

■建築史

建築史研究からは、辻槙一郎・光井渉「明治期における能楽専用施設の観客席空間　芝能楽堂の観客席における領域区分の生成について」（『日本建築学会計画系論文集』735号）。東京府文書（東京都公文書館所蔵）より新たに発見した資料など、芝能楽堂の四つの平面図を時代推定したうえで比較し、それらと上演形式、収容人数を対照することで、観客席の領域区分の変遷を明らかにした。芝能楽堂は、当初は上流階級の社交場としての性格から常設席の面積が限られ、観客の多い上演形式の場合は白州部分に仮設席を設置したが、明治29年（1896）の能楽堂規則改正以降は、あらゆる階級の観客を取り込む性格に変貌し、常設席を増やし、身分ではなく舞台との位置関係で領域区分されるようになった。著者らはここに、能楽鑑賞の場が、儀礼的・祝祭的空間から近代的な興行空間へと変わったことを読み取る。現在の「中正面」の萌芽がここにあったという指摘も興味深い。

■録音、撮影

日本音響家協会が発行する『Sound art & technologies』89号の記事「「能囃子大研究」で学んだこと」は、国立能楽堂研修舞台でのワークショップの記録。囃子の生音の凄さに、高音質フォーマットDSD方式の録音・再生でどこまで近づけるかを検証した（ただし記事の多くは音響家向けに能楽囃子の基礎知識をまとめたもの）。各楽器の測定データの分析・考察は、専門外である私には評価不能だが、記事中の丸山晴輝のレポートによると「能楽器の持つダイナミックレンジと倍音成分の帯域の広さ、（中略）能舞台の構造が音響力学

的にもハッキリと音響反射板あるいはローデッドホーン状態として機能していることなどなど、あらためて再認識できた」由。記事からは、能楽囃子への音響学的関心において、いわゆるハイパーソニック・エフェクト(可聴域を超える周波数成分のもたらす効果)が大きな位置を占めることも窺われた。

「狂言と映画の出逢い　一九六七年制作 東映教育映画《狂言》」(『武蔵野大学能楽資料センター紀要』29号)は、能楽資料センターが桜映画社と東映の協力により瀬藤祝監督『狂言』のDVD化と上映を実現したことにあわせて開催した講座の記録。三浦裕子の司会で、これに出演した山本東次郎が当時の撮影の事情を語り、記録映画作家の井上実が撮影技法を解説した。アフレコをしたこと、ドーランを塗ったこと、舞台上にレールを敷いたこと、順撮りであったこと、撮影の間の酒盛りなど、興味深い事実が語られる。これらの語りから示唆されるのは、翻訳が原典の意味に光をあてるように、ある種の翻訳行為としての映像化のプロセスを通じて、生の舞台上演の本質を知る可能性があるということだ。上記の録音の記事にも通じることだろう。

■比較、理論

伝統的な能狂言とその外部との越境的な考察を含むものを以下にまとめる。ヒーブル・オンジェイ「特別企画「笑いは国境を越える 茂山家×なごみ狂言会チェコ」東京公演 解説」(『能楽研究』41号)は、矢来能楽堂でおこなわれた公演に先立ち、著者がおこなった解説を載録したもの。なごみ狂言会チェコは、2000年より茂山七五三の指導のもとチェコ語による狂言をヨーロッパ各地で公演している。チェコ語以外は装束も技法もレパートリーも本来のものを忠実に実演する。その難しさや工夫が解説される。たとえば、カマエとハコビはヨーロッパの観客にも受け入れられる普遍性をもつが(「カマエは、全く何も分からないお客さんたちに期待を持たせる」)、本式の装束との組み合わせが重要である。また常に母音で終わる日本語の響きの良さを伝えたいが(「「日本語は舞台のために神さまが作った言葉だ」と思います」)、チェコ語でやるには様々な工夫が必要となる。こうした文化翻訳の試みの解説が、それ自体で優れた狂言論、能楽本質論をとなっている。

中尾薫「近代能楽集「卒塔婆小町」における詩人の死」(『演劇学論叢』16号)は、三島が能「卒都婆小町」をどう読解し翻案したかを論じる。能と近代劇の比較研究でもあり、翻案創作を近代の能楽受容の一例と見るならば、受容研究ともいえよう。前半の近代能楽集「卒塔婆小町」先行研究のレビューによれば(これが詳細で有益)、能への誤解もあり、精確な比較検討もなされていない。そこで本論では、当時の三島が能「卒都婆小町」に「観阿弥作のポレミックな面白味」を見いだしていたことをふまえ、かれが「美と俗悪の不二」という仏教的・形而上学的なトピックをめぐる論争的対立構造の共通性を意識して翻案をおこなったことを、場面ごとに

丁寧に対照して明らかにしている。

アイルランドの作家W・B・イェイツは、能楽研究では『鷹の井戸』で知られるが、生誕150周年の２０１５年に各地でイベントがあり、その発表を原稿化したものがいくつか。佐藤容子は「能狂言の視点からみるイェイツの奇跡劇　『復活』の劇構造について」（『イェイツ研究』48号）、及び「W・B・イェイツと能」（『エール』36号）の2本。前者は、イェイツが『鷹の井戸』の後に同じく室内舞踊劇として書いた『復活』が、語りの手法と笑いの要素をもつ点で狂言に通じると論じる。ただ、この作品の劇構造が狂言的性格をもつことの分析が全体のうちわずかな分量しか占めず、十分に説得的とは言いがたい。後者は『鷹の井戸』と、それが契機となって生み出されたその後の『鷹の泉』『鷹姫』『鷹井』の上演史を概観したもの。真鍋晶子「狂言とイェイツ」（『エール』36号）は、イェイツ自身が狂言として書いたと明言した『猫と月』と狂言「不聞座頭」との共通点を論じる。後者がフェノロサ遺稿のなかにあると指摘し、直接の影響を示唆するが、不具者が踊るというモチーフが偶然の一致である可能性は排除されていないようである。

坂東愛子「ノエル・ペリが残した近代の文化交流　オペラから能楽への軌跡」（『武蔵野大学能楽資料センター紀要』29号）は、能の最初の仏訳者ペリに関する従来あまり知られていなかった次のような事績を明らかにする。東京音楽学校における音楽教育と日本人による最初のオペラ上演、池内信嘉らの能楽文学研究会での活動、没後大正12年（１９２３）にパリで開催された追悼記念会。同会では能が上演され、居合わせた森茉莉の記によるとニジンスキーも観客であった由。

石黒吉次郎「演劇・芸能における二人物の系譜」（『専修人文論集』100号）は、舞楽から近世芸能に至るまでのペアの舞踊表現の系譜を概観し、現実の人間同士、人間と人外、動物同士に分類する（前二者はさらに細分）。「二人静」「二人袴」をはじめとする能狂言の相舞も、こうした系譜のなかで見直される。系譜化と分類を通じ、あらためて二人で舞踊することの人間学的な意味を探求する可能性を示唆して稿を閉じる。

横山太郎「演劇的フィクションの構造　能の語りをめぐって」（『早稲田文学』２０１７年春号）は、観客が物語中の虚構の世界が目前に立ち現れるかのような体験をすることを「演劇的フィクションの成立」と呼び、日本語演劇がそうした体験を生み出す仕組みの起源が、能の「語り」のなかにあると論じる。前半部では、現代の哲学及び文学理論におけるフィクション概念が、世界認知を流動化し更新する力を認めるという点で日本中世の狂言綺語概念と相同的であると指摘。そのうえで、狂言綺語の徒であるシテが自らの体験報告の語りにワキ（＝観客）を巻き込み、虚構のビジョンを体験させる仕掛けの典型として「弱法師」を読解した。本論文には、演劇等へ拡張されつつある近年のナラティブ理論（マンフレッド・ヤーンなど）との接点があるが、参照できておらず今後の課題。

■資料紹介

戦後の東海地方における素人愛好家の実態を紹介するのが、飯塚恵理人「戦後東海地域古典芸能資料の紹介　写真から伺える能楽・箏曲愛好者の実際」（『椙山人間学研究』12号）。能楽については、疎開中の塚田秀雄（シテ方観世流）を招いて始まった中津川謡曲連盟の社中会の写真を掲示し、その解題において、純粋な舞台鑑賞よりも素人稽古が主体であった昭和の能界の一端を明らかにする。（横山）

【外国語による能楽研究】

◎論文

○ Barbara Geilhorn. “Women in a Man’s World: Gender and Power in Japanese Noh Theatre.” *Women in Asian Performance: Aesthetics and Politics*, edited by Arya Madhavan, Routledge, 2017, pp. 28-38.（バーバラ・ガイルホルン「男の世界の中の女性たち：能楽におけるジェンダーと権力」）

能上演における女性（能楽師、素人弟子、観客、能楽師の家族）の役割を歴史的に概観したのち、女性能楽師を認めつつも周縁化する能界内の様々な構造上の障壁と、それらを乗り越えてきた女性能楽師たちの軌跡を、とりわけ鵜沢久に注目しつつ追う。男性能役者をシテとする能を女性地謡で上演する鵜沢久の試みは、演者の性差によって能を二種（「能」と「女流能」）に区別しようとする従来の性差別的な枠組みを超越した、より包括的な能の将来を開く可能性を秘めたものであると説く。

○ Diego Pellecchia. “Noh Creativity? The Role of Amateurs in Japanese Noh Theatre.” *Contemporary Theatre Review*, vol. 27, no. 1, January 2017, pp. 34–45.（ディエゴ・ペレッキア「能の創造性？：能楽における素人の役割」）

社会人の素人弟子と大学の能クラブの調査や、能の素人弟子の活動をめぐる近年の盛んな研究事例をひきつつ、素人弟子が果たす役割を考察する。アマチュア実践に関する欧米の研究が指摘するような「商業的文化活動の利益追求目的から解放された、規範的マスカルチャーに抵抗する存在」というアマチュア像は、師匠の教えが絶対である能の素人弟子には当てはまらないこと、また、能界の序列の最下位に位置する彼らが能界を支える経済的基盤を構成していることを論じ、素人弟子（とりわけ若い素人弟子）との双方向的「対話」による刺激が、能が今日失いつつある現代社会との接点を生み出す可能性を指摘する。

○ Mae Smethurst. “Noh and Greek Tragedy.” 『能楽研究』四一号、二〇一七年、二三〇―二四〇頁。（メイ・スメサースト「能とギリシャ悲劇」）

能とギリシャ悲劇の比較研究の大家である著者が、役者、合唱隊、劇場構造、仮面、所作、という五つの要素の発展と変化という観点から、両ジャンルの類似点と相違点をコンパクトにまとめたもの。これらの要素の歴史的変遷を考慮に入

れると、世阿弥の能との比較対象としてはアイスキュロスの作品が、より劇的な傾向を強める室町後期の能との比較対象としては、アイスキュロスより後の時代にあたるソフォクレスやエウリピデスの作品がふさわしいと結論する。（竹内）